高島市ゆかりの文人たち

俳諧の広まり

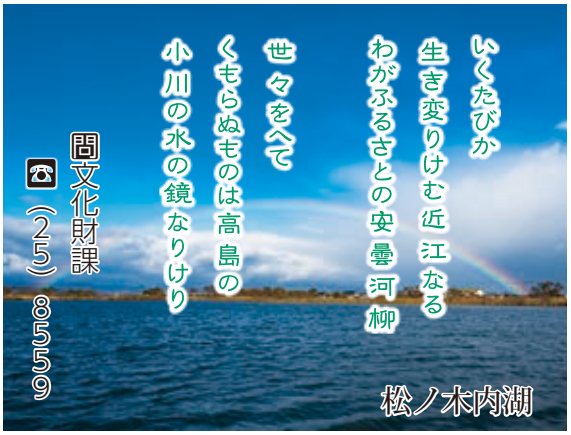
日本文化の中心であった京都に隣接する近江では、文化を志向する人が多く、優れた文人が多く誕生しています。『奥の細道』など、多くの紀行文を著した俳人・松尾芭蕉は、近江の風光と人々をこよなく愛し、たびたび近江を訪れていたことが分かっています。そのため、県内には数多くの門人がいたほか、芭蕉の句碑も各地に建立されており、市内でも白鬚神社境内や今津町浜分区にあります。

芭蕉の句碑
（今津町浜分）

一方、市内では、芭蕉が貞享2年（1675）に近江を訪れる前からすでに俳諧が多く詠まれていました。明暦2年（1656）、近江出身の俳人である北村季吟の師、松永貞徳の高弟の安原貞室が俳書『玉海集』を発刊しました。ここには、近江の俳人の句が数多く集録されており、その中には今津町の石崎可隆と中井長次の句がみられることから、市内には早くから俳諧を嗜む習慣が広まっていたのではないかと考えられます。

歌人「渡 忠秋」

渡 忠秋は、文化8年（1811）安曇川町南船木で長男として生まれ、幼いころから歌道を志し、二十代で京都に移り住むと、家督を弟に譲り、桂園派の祖香川景樹の門に入って歌道を学びました。その後、明治6年（1873）には、宮内省御歌所の寄人に就任し、御歌や歌御会関係の事務を担いました。あるがままの純粋感情を重んじる桂園派には多くの門人が集まり、当時の歌壇の一大勢力となっていました。忠秋は、この桂園派を継ぐ代表的歌人として、景樹の高弟と称され、『桂蔭集』や『読史有感集』『先人抄』などの歌集を刊行しています。安曇川町南船木の西光寺の境内には、明治45年（1912）、桂蔭会（忠秋を追慕する人々の会）と旧高島郡教育会が共同して建立した歌碑があります。ここで、忠秋が故郷の高島を詠んだ歌を二つご紹介します。



渡忠秋の句碑
（西光寺境内）

編集雑感

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、今年の夏にはいよいよ東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されます。市内でもメタセコイア並木道で聖火リレーが行われ、今後益々盛り上がってくること間違いなしです！これは「高島市」の魅力を全国に発信する絶好のチャンスであり、私たち広報担当の腕の見せどころです！

その日に向けて早速準備に取り掛かります！！（YO）

広報たかしま
令和2年 1月号 No.240
発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。